

会津・高巖寺の木造天部形立像

若林 繁

Tenbu Style Standing Wooden Buddhist Sculpture in Kouganji Temple, Aizu

Shigeru WAKABAYASHI

はじめに

高巖寺は会津若松市中央2丁目にある浄土宗の寺院である。市の中心部に近接する地に位置する。木造天部形立像は現在、本堂内に安置保管されている。破損が激しく、大きく像容を損ねており、その上後世の手が加わり十一面観音に作り替えられている。それでも造立当初の造形が何とか保持されており、平安時代前期に溯る造立と考えられる。会津若松市内に、このような古像が伝えられていることは稀なことで、ここに報告するものである。

1. 像の概要

現状の像高が107.3cmである^(註1)。髻を結ぶ。現状では髻頂に仏面、地髪上正面から両側面にかけて一列に九面、背面に一面を配す。髻正面中央には化仏を置く。大袖の衣をつける。左手屈臂して前に出し、掌を内に向け五指をまげる。右手垂下して軽くまげ、同じく掌を内に向け五指をまげる。裳をつけ、腰紐を結ぶ。両足をそろえて立つ。

桂材で、一木造、彫眼とし、現状では素地をあらわす。詳しい構造は、木心を像前面中央右寄りにこめた（首の右下では半分こめる）一材で、髻より頭体通して両手前膊部から袖先まで含んで地付きまで彫出する。内刳はない。頭上面は各柄差しとする。両手前膊袖口部上半は各一材を矧ぎ、両手首より先をそれぞれ袖口に矧ぐ。正面両脚部の膝より地付きまで小材を矧ぎ足す。両足先をそれぞれ矧ぎ、像底には板を貼る。

保存状態は、頭上面のすべて、両手前膊袖口部上半の材、両手首より先、両脚間の膝より地付きまでの小材、右足先、像底の板が後補である。さらに頭上面のうち仏面、髻正面中央の化仏、左手第三～五指先、左足先を欠失する。全体に磨損や朽損があり、特に面部から両耳にかけて朽損が激しく、両耳は欠損する。両袖先も同様に欠損する。現状では髻頂部及び同正面が削られ平らになっ

ている。髻頂部には丸柄、同正面には丸柄の跡が削平面のほぼ中央に残り、それぞれに仏面と化仏を置いていたものと思われる。像底部は切り詰められ、その面に板を貼り、像が安定するように処置されている。



写真1 木造天部形立像（正面）高巖寺



写真2 同（左側面）

2. 造立年代について

この像は髻頂部及び像底部が削られ、現状では107.3cmの像高であるが、当初は1mをはるかに超える大きさがあったものと思われる。そして頭体通して両手前膊部から袖先まで含んで地付きまで一材で彫出し、内刳を施さない徹底した一木造で、ここにこの像の技法上の大きな特色がある。このような技法の作例を求めてみると、まず会津では湯川村勝常寺にある。勝常寺には薬師如来及び両脇侍菩薩立像をはじめとして、合計12躯の平安時代前期の仏像が伝えられている。その中に2躯の地藏菩薩立像があり、1躯は延命地藏と称され、像高が182.5cmで、他の1躯は雨降り地藏と呼ばれ、像高が168.0cmである^(註2)。いずれも頭体通して両袖をも含んで一材で彫出し、内刳もない。福島市大蔵寺には現在、収蔵庫などに28躯の仏像が伝存している。大半は大きく破損しているが、すべて一木造で、像



写真3 同（右側面）

根幹部の像容は何とか残っている。いずれも平安時代の造立と考えられる。この中にも同様の技法の遺例がいくつか伝えられている^(註3)。現状像高が119.0cmの地蔵菩薩立像は、左肩前に木心をこめた一材で、頭体通して両手前膊部から両袖先をも含んで両足下まで彫出し、内刳はない。現状像高が127.9cmの如来形立像も同様の技法である。

帝釈天と考えられる像は、大蔵寺諸像の中ではもっとも保存状態がよく、形状もよくわかる。像高が122.7cmで、髻を結び、山形の宝冠を戴く。天冠台彫出（幅広の紐）。天冠台下地髪部を平彫とする。三道彫出。甲をつけ、その上に大袖の衣をつける。両手は屈臂して前に出す。沓をはき、両足をそろえて立つ。構造は像中心よりやや右寄りに木心をこめた一材で、髻頂から頭体通して両手前膊部より両袖先をも含んで両足柄まで彫出し、内刳は施さない。両手首を各袖口に差し込み矧とし、両足先をそれぞれ矧ぐ。両耳朶及び鼻先に各小材を矧ぎ足す。保存状態は、左足先及び右足柄前半部が後補で、両耳朶及び鼻先の小材、両手首より先、右足先を欠失する。さらに髻頂より後頭部右方にかけてと裳裾下に朽損があり、像前面に大小の干割が入るが、全体の像容を損ねるものではない。

勝常寺の2軀の地蔵菩薩立像はどっしりとした量感のある造形や太い衣文表現などから、9世紀の造立と考えられる。脚部をわたる衣文には翻波式衣文がみられ、磨滅があるとはいえ太い衣の襷が力強く彫出されている。特に腰から脚部にかけての量感は圧倒的な強さがあり、9世紀初期の造立とみられる同寺薬師堂本尊の薬師如来及び両脇侍菩薩立像に通じるものがある。大蔵寺の地蔵菩薩立像も腰から脚部にかけての量感は、勝常寺諸像に迫る。ただし衣文の彫出はやや浅くなり、10世紀の造立と考えられるのである。如来形立像では、腰部の量感が地蔵菩薩立像ほどではない。地蔵菩薩立像よりは多少後の造立と考えられる

が、10世紀を下ることはないであろう。帝釈天立像は両肩に丸みが加わっているが、胸や腹部の肉付けには力感がこめられている。やはり10世紀の造立と考えられる。処々に渦文があらわされ、やや装飾的に配されている。両袖先まで頭体材より彫出する一木造の技法は、福島県内では9～10世紀の仏像にしばしばみられる。技法から考えるならば、高巖寺像も9～10世紀の造立とみなされ



写真4 同（背面）



写真5 同（部分）

るのである。大きさも、他の諸像に匹敵する。

造形面でも、高巖寺像の肩幅のあるどっしりとした体躯は、勝常寺地蔵菩薩立像と同様である。しかし高巖寺像では像前面の磨損が激しく、肉付けが平板になっている。おそらく当初はより肉付けが豊かであったものと思われる。像前面に比べて側面から背面にかけては、比較的保存状態がよい。背中は広く、肉身の盛り上がりもうかがえる。そして腰から脚部にかけての量感には力強さと、重量感がこめられている。この部分の圧倒的な量感表現は、勝常寺地蔵菩薩立像に及ぶ。両袖の造形では、勝常寺像の薄く鋭さのある彫出に対して高巖寺像では厚く重々しく、動きに乏しい。両袖先を欠損し、磨損があることを考慮しても、厚く重々しい造形は否定できないであろう。このような造形は、むしろ大蔵寺帝釈天立像に近い。これらのことから、高巖寺像の造立は9世紀末から10世紀の頃と考えられるのである。

3. 尊像の種類について

尊像の種類を考えると、造形的に共通するところが多く、造立年代も近い大蔵寺帝釈天立像が参考になるであろう。大蔵寺像は大きな髻に、正面に山形の宝冠を戴く。高巖寺像は頭上面や化仏をつけるために、髻頂部が平らに削られ、同正面中央も同じく削られている。さらに地髪上も九面を配するために手が加えられていると思われる。当初の髻は現状より大きく、あるいは正面には宝冠があったかもしれない。そして幅広い天冠台が額から後頭部に巡っていたものであろう。その部分に薄い盛り上がりが残っている。大袖の衣をつけ、腰紐を結ぶ。大蔵寺像では腰紐の表現はない。奈良時代の遺品であるが、東大寺法華堂の脱活乾漆像の帝釈天としている像は、寛衣をまとい腰紐を締める。帝釈天像は、梵天像とともに安置される。この場合、武装している方を帝釈天とするのが、普通といわれている^(註4)。大蔵寺像は胸部に甲が彫られているのがわかり、帝釈天と判断される。高巖寺像は上半身が大きく磨損しており、甲の有無は不明である。ここでは大蔵寺帝釈天像に像容や造立年代が近似するところから、一応高巖寺像も帝釈天と考えておく。

4. 伝来及び原所在について

この像の伝来については、よくわからない。高巖寺の縁起をみると、『会津旧事雑考』^(註5) 卷之二文明6年（1474）の条に

浄侶岌伝嚮終於神田無量寺住来寓黒川縛菴住有歳寂矣嗣次岌天相攸城西建一宇号成道山高岩寺とあり、一部意味の把握しにくいところもあるが、創建の経緯は理解できる。『新編会津風土記』^(註6) 卷之十七高巖寺の条には

浄土宗京師知恩院の末寺なり山号を盛道山と云初岌伝と云僧福田無量寺に住し斗藪の志あり跡を晦してこの地に来り茅庵を結び念仏三昧に入て歳月を送る其徒弟岌天師を尋てこゝに来り文明六年にこの寺を建立せり仍て岌伝を草創として岌天を開基とせり

とあり、初め岌伝が会津の地に来て庵を結び念仏三昧に入っていたところ、徒弟の岌天が師を尋ねて来て、文明6年に当寺を建立したことがわかる。岌伝を草創、岌天を開基とする。この像は平安

時代の造立で、もとより当寺に伝来したものでないことは、当寺の縁起からも納得できるのである。

現状では、十一面観音に改められている。頭上面は正面三面が菩薩面、左側の三面が瞋怒面、右側の三面が狗牙上出面、背面の一面が大笑面につくられており、正確にあらわされている。各面の造形は整っており、それぞれの表情は的確にとれえられている。しかし形式化した造形となっており、制作は江戸時代以前に溯ることはないであろう。頭上面を補った頃の保存状態は、現状と大差なかったものと思われる。尊像の種類も判別できないほどに、破損が進んでいたものと考えられる。そこで信仰を集めていた十一面観音に改めてしまったものであろう。以後、十一面観音として信仰され、安置されてきたものと考えられるが、改められてからの保存は行き届いていたようで、欠失はあるものの頭上面の状態は良好である。しかしいつ頃、当寺に納められたものか不明という他はない。

現在、この像が高巖寺に安置保管されているところから、この像の原所在は会津若松市内と考えられないこともない。高巖寺の本尊である阿弥陀三尊像は、もともと当寺に安置されていたものではない。すなわち『会津旧事雑考』^(註7) 卷之二元久元年（1204）の条に

萱津蓮華寺建也大塔本尊弥陀三尊也伝云今高巖寺客殿仏是也云

とあり、高巖寺の像はもと萱津村蓮華寺の大塔の本尊であったことがわかる。『新編会津風土記』^(註8) 卷之十七高巖寺客殿本尊の条では『会津旧事雑考』のこの記事について

河沼郡千沢組上茅津村昔は萱津村と云し由見ゆ同組に中茅津村ありまた坂下組に下茅津村あれ共皆蓮華寺と云寺ありし事を伝へす

とあり、萱津村に上、中、下の三つがあり、いずれも蓮華寺という寺があったことを伝えていないという。蓮華寺は同書の編纂された文化6年（1809）より、かなり以前に廃れてしまったものであろうか。萱津村は会津地方の中部の現在の会津坂下町にあった村で、村名は南北朝時代からみえていくという^(註9)。高巖寺の本尊が会津地方の中部より移座されたものであるならば、当寺には会津地方の広範囲の地域より尊像が移されている可能性があるかと推察される。この像も会津地方のいずれかの地より移座されたものと考えられるのである。

9世紀の初期には、会津では徳一の活動があった。恵日寺、勝常寺の建立や諸像の造立には、徳一の力が大きかったものと考えられる。弘仁6年（815）の「陸州の徳一宛」弘法大師空海の書簡が、『高野雑筆集』に収められている^(註10)。そこには徳一の活動内容が記されており、京を離れ東へ行き法を説いて万人の仏種を發揮させたとあり、

薩埵の同事、いずれの趣にか到らざらん （原漢文）

と、徳一の大衆教化も到らないところがないと賞讃している。弘仁6年の頃、徳一の教化活動が会津一円に及んでいたことが察せられるのである。会津地方は広大である。大衆教化をより強力に推進するために、徳一は会津の各地に拠点を置いたものと思われる。会津美里町には、像高が97.8cmの個人蔵の吉祥天立像^(註11)が伝えられている。髻を結び、髪を背面中央及び両胸前に長く垂らし、大袖の衣に鱗衣、裳及び蔽膝をつける。構造は髻頂より頭体通して左上膊部半ばまで含んで方形の

台座まで一材で彫出しており、内刳はない。左上膊部半ばより袖先まで一材で彫出し、左上膊部に矧ぎ、右腕は肩先より袖先まで一材で彫出し、肩先に矧いでいる。両手首は各袖先に差し込み矧とする。両袖部は各別材となっているが、頭体を一材で彫出し、内刳を施さない技法は高巖寺像と同様で、この像では台座まで彫出しているところが特異である。さらに両袖の重々しい造形も両像に共通する。吉祥天立像の量感のある体躯、丸々とした張りのある両頬の肉付けなどは勝常寺の雨降り地藏に近く、9世紀の造立と考えられるのである。

同町雀林に法用寺という古刹がある。その観音堂は『新編会津風土記』などに載る縁起よれば、養老4年（720）得道上人の建立、大同年中（806～10）徳一の再興と伝えている。これとは別に当寺観音堂の厨子内に納められている正和3年（1314）の厨子の棟札^(註12)には

自弘仁二年 至五百□年

とあり、一字判読できないが、弘仁2年から正和3年までは504年となり、「四」と解される。弘仁2年（811）より、504年に至ると記されている。当寺の草創を弘仁2年としており、このことを証する史料は他にないものの、鎌倉時代では当寺の創建を弘仁2年としていたことがわかる。縁起にいう徳一の再興年代に近いのは偶然としても、これはより事実迫っているのではなかろうか。弘仁年間といえば、徳一の会津での活動時期に当たる。徳一の活動が当地に及んだことも十分に考えられ、この地域にもそれを支える拠点があったものであろう。それが法用寺の創建縁起の中に残ったものと考えられる。このような動きの中で、吉祥天立像が造立安置されたとも考えられるのである。

高巖寺像は、勝常寺諸像、個人蔵吉祥天立像よりはやや後の造立と考えられ、9世紀から10世紀に入る頃は、いまだ徳一及び弟子たちの活動の影響が残っていた時代と思われる。そのことを示す遺品に会津坂下町の上宇内薬師堂の本尊薬師如来坐像がある^(註13)。像高が182.6cmで、勝常寺薬師如来坐像よりやや大きい。両肩を覆う衲衣の付け方は勝常寺像と同じで、堂々とした体躯の造形も等しい。ただしこの像は顔貌が丸みを増し、衣文の彫出も浅くなっており、10世紀に入る頃の造立と考えられる。頭部から体躯の大部分を一材より彫出し、内刳もない。脚部は横に一材を矧ぐが、体躯の大部分を一材より彫出するところは、一木造が徹底している。この像は勝常寺像の系統において造立されたものと考えられ、会津坂下町のあたりにも徳一の教化の拠点があったものであろう。高巖寺の天部形立像も、徳一及びその一派の活動拠点の一つに造立安置されたものではなかろうか。

おわりに

徳一の会津での活動時期の遺品は湯川村の勝常寺に集中しており、当寺が会津布教の中心的役割を果たしていたことは、地理的にも了解できる。湯川村は、会津地方のほぼ中心に位置する。そして広い会津地方の教化には、それを遂行するための拠点が必要であったにちがいない。会津美里町個人蔵の吉祥天立像、会津坂下町の上宇内薬師堂の薬師如来坐像などの諸像は、そのような拠点に造立安置された仏像の一部で、高巖寺の天部形立像も同様であったものであろう。徳一の活動時期

から、その影響の続いていた時代、すなわち10世紀の初め頃までは、活動の拠点が会津地方の各地に点在し、機能していたものと考えられるのである。

註

- 1) 詳しい法量は以下の通りで、すべて現状。(cm)

像 高	107.3	肩 張	32.8
髪 際 高	97.0	胸 奥	17.8
髻 頂 - 顎	23.1	腹 奥	18.6
髪 際 - 顎	13.2	肘 張	40.2
面 幅	11.8	袖 張	37.5
耳 張	14.4	裾 張	23.5
面 奥	15.7		
- 2) 『湯川村史』第1巻 第2章解説第3節勝常寺の仏像 昭和60年3月 湯川村 拙稿『ふくしまの仏像 -平安時代-』 2002年4月 歴史春秋出版.
- 3) 拙稿『大蔵寺の仏像 -東北の一木彫像-』 平成5年3月 福島県立博物館.
- 4) 『奈良六大寺大観』第10巻 東大寺2 1968年8月 岩波書店.
- 5) 寛文12年(1672) 向井吉重編 『福島県史料集成』第4輯 昭和28年1月.
- 6) 文化6年(1809) 藩撰 『大日本地誌体系』 昭和59年12月 雄山閣.
- 7) 註5) 参照.
- 8) 註6) 参照.
- 9) 『角川日本地名大辞典』7 福島県 昭和56年3月 角川書店.
- 10) 勝又俊教編 『弘法大師著作全集』第3巻 昭和53年6月 山喜房仏書林.
- 11) 拙稿『ふくしまの仏像 -平安時代-』 2002年4月 歴史春秋出版.
- 12) 拙稿『会津高田町史』第2巻 第2章古代・中世第5節金石文 1997年3月 会津高田町.
- 13) 拙稿「会津の仏像」『会津若松市史』17 平成17年3月 会津若松市.

